

## 編集後記

6月号の日本消化器外科学会雑誌にはご覧の通り原著2編、症例報告11編および臨床経験1編の計14編の論文を掲載できました。原著の1編の山田論文は、胃癌リンパ経路の検討を実地症例と解剖体との対比を行った外科学本来の極めて素晴らしい研究である。また、もう1編の池田論文も術後患者さんにおける生理学的な検討であり臨床的意義の価値の高い研究である。近年、分子生物学的あるいは遺伝子学的手法を用いた研究が外科領域でも大勢を占めているが、このような実際の臨床症例における解剖学的、生理学的研究は一見、新鮮味に欠けると感じられる研究者もいると思うが、このような研究こそ臨床外科学の王道であり、貴重な研究発表であると私は考えている。このように言うと新しい分子生物学的あるいは遺伝子学的手法を用いた研究を否定していると勘違いされるかと思うが、そうではなく私が言いたいのは解剖学的、生理学的、分子生物学的および遺伝子学的というのはあくまで研究のアプローチであるということである。外科学の発展に寄与する研究においてはその手法を問わず、現在の実地医療のどのような臨床外科上の問題点から発想された研究課題であるか、さらに今後どのように臨床外科の発展につながるかといった点を明らかにしえたのが最もその研究の価値を決めるものであるはずであり、私が言いたいのは研究手法の最新性や高度性によるものではないということである。もちろん動物実験であれ臨床研究であれ同様にその価値は、研究の目的およびその結果がどのような現在およびこれからの外科学に寄与しえる可能性を持っているかが重要なのである。私自身色々な研究をしてきたし発表もさせてもらってきたが、後輩の医師に研究テーマを与えるのにはいつも苦勞をしてきたのが実情である。しかし、そのテーマのほとんどは実際の外科臨床で自分自身が行っている中での問題点、疑問点を解決する目的から生まれた課題を研究テーマにしていくのが外科学の分野で研究に携わる者の役割かと信じている。これからも良い外科研究論文が発表され続けて行くように大学にいる者の責務として頑張って行かねばと痛感する次第である。本号の原著2編の研究を直接指導された方にエールをお送りしたい。

(宮崎 勝)